

世界仏教文化研究センター

リレーエッセー

## コロナ社会で共に生きるために

No. 9

### Stay House から Stay Home へ



世界仏教文化研究センター 国際研究部門  
菊川 一道（博士研究員）

新型コロナウイルスの感染拡大により、亡くなられた方、大切な方を亡くされたすべての皆様に心より哀悼の意を表します。現在も多くの方がウィルスと闘っています。一日も早い快復と平穏の訪れを心から願ってやみません。

未知のウィルスによって、私たちの暮らしは一変しました。様々な不安やストレスを抱えて過ごしている方も少なくないでしょう。先日、とある報道番組で、今年度大学に入学した新入生の多くが、一度もキャンパスを訪れることなく、自宅からオンラインでの学びを余儀なくされている実態が特集されていました。振り返ると、私も進学のために地元を離れて一人暮らしを始めた当初、とても心細かったことを思い出します。それでも無事に過ごすことが出来たのは、キャンパスで出会った友人たちの支えによるところが大きかったように思います。

しかし、今は感染拡大を避けるため、人との接触を極力避けるよう指導されます。こうした状況下では、新たな友人関係を構築することは難しく、特に新入生の皆さんが多大な不安やストレスを抱えておられることは想像に難くありません。



“ソーシャル・ディスタンス” (Social Distance) という言葉が世界の共通言語となり、すでに数カ月が経ちます。これほどまでに人と人との接触＝「つながり」がネガティブに捉えられたのは、過去にあまり例のないことです。本来「つながり」は、私たちが想像する以上に多くのメリットを有しています。政治学者のロバート・パットナムは、他者とのつながりを「社会関係資本」(Social Capital) と呼び、職場や学校、地域等における充実した人同士のつながりが、個々の健康や寿命、また周囲の犯罪発生率や政治参加率などと相関関係があることを明らかにしました (『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』2006年)。そこでは、豊かなつながりを持つ人ほど、愛他的・利他的な行動に結びつきやすいという事例も報告されています。つまり、他者との豊かな交流が、社会における人々の支え合い行動を活性化するというのです。

このように、人と人とのつながりは本来「資本」と呼ばれるほどに、私たちの生活を支える潤滑油のような役割を担っています。ディスタンスが要求される時代においても、オンラインなどを利用して、新たな形で人間関係の構築が不可欠であることは言うまでもありません。



もう一つ、最近とても気がかりな問題があります。それは、コロナウィルス感染者やその家族、周囲の人びとに対する差別や偏見です。ウィルスを完治させ、無事に退院した方がとあるインタビューの中で、「ウィルスよりも、人間の方がはるかに怖い」と述べられたことが、とても印象に残っています。その方は、自分が感染したことで、SNSなどで言われのない誹謗中傷を受け、大変に心を痛めたそうです。こうした事態が今各地で深刻な問題になっています。ウィルスとの闘いだけでも困難を強いられるなか、同じ人間からも攻撃を受けるというのはとても悲しいことです。

浄土真宗の開祖・親鸞(1173-1263)の人間観を表す言葉に、「煩惱具足の凡夫」があります。「煩惱」とは、欲望や怒り、妬みなどの心に振り回される自己中心的な生き様を表します。また「凡夫」は、聖者とは正反対の凡庸な人を指します。

「煩惱具足の凡夫」とは、誰か特定の人を指すのではなく、自分中心に物事を捉え、他者への迷惑を顧みない私たちのことなのです。

パンデミックという非日常において、自分ファーストで傍若無人に振舞い、フェイクニュースにそそのかされ、誤った情報を拡散する。それどころか、怒りに任せて他人を攻撃する。これらはまさに「煩惱具足の凡夫」の最も悪しき姿という他ありません。

人間は等しく不完全な存在です。煩惱に振り回される不完全な人間だという

自己認識は、自身の考えや行動の正当性への懐疑を伴います。一方、「自分は正しい判断をしているのだろうか」という問いを失うと、そこには傲慢が生じます。だからこそ、思考停止することなく多くの情報や他者の多様な声に真摯に耳を傾け、安易な行動を慎む態度が求められます。



コロナウィルスを食い止める確実な方法が無い中において、「ステイホーム」(Stay Home)の風潮は今後もしばらく続くでしょう。しかし、その実態の多くは「ステイハウス」(Stay House)なのかもしれません。ただ自宅に止まり、人との接触を避ける。こうした状況は、ステイ「ハウス」と言わざるを得ません。英語の「ホーム」には、家や家庭という意味の他に、「居場所」や「安心できる拠りどころ」という意味があります。信頼できる情報やデータに基づいて、自他共に安心を得られる「ホーム」を作っていくことも、大切なステイホームの一面ではないでしょうか。

最後に宮沢賢治(1896-1933)の言葉を紹介します。

世界がぜんたい  
幸福にならないうちは  
個人の幸福はあり得ない。

(宮沢賢治『農民芸術概論綱要』1926年)

誰かが傷ついている間は、自己の幸福は実現しない。ストレスの多い時期だからこそ、他者と共に生きる世界について、改めて皆さんと一緒に考えたいと思います。

### 【著者紹介】

専門：真宗学、近代仏教

論文：「東陽円月——非公式ハワイ開教僧たちの師匠」

(高満也、吉永進一、碧海寿広編『日本仏教と西洋世界』法蔵館、2020年)

「真宗私塾の研究」(『龍谷大学大学院 文学研究科紀要』2016年)

「お寺」と地域の公共性—なぜ、寺は潰れないのか?」

(小林正弥、藤丸智雄編『本願寺白熱教室』法蔵館、2015年)